

「鍋沢ノート」を整理して

北海道沙流地方に残された数少ないユーカラクルの一人であった鍋沢元蔵翁が永眠されたのは、夏もまさに盛りにならんとした昭和42年7月12日のことであった。翁は生前、アイヌ文化の伝承者であったばかりでなく、熱心な研究者として夙にその保存に尽力され、晩年に至ってからは数々の優れた記録を学界に提供された。そのため、これらの業績が高く評価されて、昭和42年11月北海道文化財保護功労者として表彰されたのである。さきに沙流の伝承者鳩沢ワテケ姫を失ない、再び鍋沢元蔵翁の他界をみたことは、まことに惜しむべきことであった。

翁は明治19年6月14日、沙流川のほとり紫雲古津村で生をうけた。明治31年沙流川洪水を契機として、対岸の新平賀へ部落と共に移動したのは14歳の時だった。父のサシンカウクは40才で夭折したので、父に代って妹を養育しなければならず、学校へも満足に行くことが出来なくて、僅か2年で終わってしまったという。青年時代の翁は非常な苦勞の連続であったらしい。

新平賀の地は、古くからユーカラ淵叢の地と知られたピラカコタン(Piraka-kotan)のあったところで、古老のワカルパを始めとしてチクプシリヤヤシンノアシに接しては、次第に口誦文学の世界へと傾倒していったようだ。大正10年頃、35歳の時はじめて自らペンを執った記した「ランケエピシ、ホブエエピシ」というユーカラを、旭川で会った金田一京助先生に提供したという。このことについて先生は次の如く述べて居られる。

「…(前略)。ユーカラを自らペンをとって紙の上へ書き下ろす試みをしたアイヌの翁がひとりあった。鍋沢元蔵、アイヌ名モトアンレクである。

モトアンレクは、幼い時は、家が貧しかったために、働かされて、小学校へも上がれなかったそう。それなのに、成長する間に、独力で勉強をして、片かな、平がなはもとより、漢字も覚え、標準語も身につけて、1人前の日本国民になったのであるが、祖先の風習にも着実に心を注いで、立派なアイ

ヌ語、アイヌ伝説にも精通している。

私が初めてこの人を見たのは、大正10年ごろ近文の金成マツさん方においてであった。何ということなく毎日訪れて、マツさんや老母のモナシノウクさんのユーカラに親しんでいるようだったが、私がまだ40才ぐらい、モトアンレクは、私より年長に見えたけれど、この人たちは、年のわりに、ふけて見えるから、まだ30代だったかもしれないが、片かな書きの2冊のノートへユーカラを自分の手で見事に書きあげて持っていたのである。全部片かなで書き流していたが、かなりアイヌ語のくせを書き分けていて、うれしいものだったし、まだアイヌとしてはだれも、書いた人が見つからなかったから、これが私の見た最初のアイヌのユーカラ記録だった。

彼の苗名の鍋沢は、沙流アイヌの巨村、紫雲古津の原名シュウンコツ(本当はシュムコツ「西窪」のなまり)の訳で、その方言はアイヌ語の標準語であるから、彼のユーカラ記録は、同じアイヌ人の書いたものといっても、本格的なもので大いに価値あるものである。

その後、絶えず、筆記の仕事をつづけて、私以外の人の所有に帰してるものもあるが、3年ほど前、NHKの「鐘が鳴る」の時、はるばる飛行機で飛んできて幕開きにユーカラを演奏したり、ステージで私へアイヌ刺繍(ししゅう)衣を着せて囃采(かっさい)を博したりしたが、その日の私への「みやげ」に、また、5冊の筆録をもってきて与えてくれた。ユーカラ・オйна・アイヌ語の祝詞と、一応まとまったアイヌ文献で私の珍藏するところとなっている。往々邦語訳も一行おきについているが、原文が詩であるゆえ、文語の訳になっている。その文語訳は、さすがにいまだしいが、しかしアイヌ文学史上の人としては逸すべからざる人である。……(後略)。(口誦伝承の世界「北辺から見た日本十話」昭和37年1月毎日新聞所載)。

私が初めて翁の業績を知ったのは昭和34年の夏のことであった。この頃はすでに7年ほど前に福満から富川町へ移られて、のんびり隠居ぐらしの生活だった。自分で書いたのだというユーカラを、大学ノートにぎっしりと並んでいるのを見せてもらったが、アイヌ語などは全く門外漢だった私でも、た

ただただ驚嘆するばかりであった。

また翁は、道内はもとより遠く本州から訪れる研究者に対して、採録の援助や案内を引き受けることが屢々あって、結構忙しい毎日を過しているようだった。NHKのアイヌの音楽の収録に協力されたのも、近藤鏡二郎氏の沙流アイヌの歌謡研究の手助けをされたのも、この頃だったと記憶している。

昭和37年3月3日、思いもよらぬ火災に遇って住宅を全焼されたのは、ノートの筆録が順調に進んだ矢先のことだった。今までのノートは一瞬にして灰燼に帰してしまったのである。その時の翁の心中は察するに余りあるものがあった。けれども「生きているうちに是非とも、受け継いできた遺産を残しておきたい」という翁の信念は少しも変わることなく、また初めからノートに書き記す作業を続けられた。やがて最初のユーカラの書き下しを終えた。「クトネシカ (kutune sirka)」〔虎杖丸の曲ともいう〕であった。ノートには昭和37年10月と記されてある。

門別町郷土史研究会が、事業の一環として「鍋沢ノート」の刊行を計画したのは、ちょうどこの頃であった。これは貴重な文化財の保存もさることながら、翁の並々ならぬ努力に報いんがためでもあった。やがて筆録ノートは、門別町文化財調査シリーズ第一集「アイヌ叙事詩 クトネシカ」として、昭和40年10月に発刊され、続いて同シリーズ第三集「アイヌ祈詞」が、昭和41年8月に刊行されていった。翁の喜びと感激は、またたとえようもなかった事は言うまでもない。ますます心血を注いで筆録に専念され、ノートの数も次第に目をみはるばかりであった。

しかし、第三集「アイヌの祈詞」刊行後、まもなく翁は病を得て入院された。一時は回復されるかに見えたけれども、病は次第に悪化して、遂に翌年7月不帰の客となった。81才であった。

鍋沢翁の歿後、ご遺族より生前の筆録ノートは、今となっては貴重な資料ともなり、私物化しては散逸のおそれもあるゆえ、しかるべき公共機関へ提供して保存措置を講じたい旨、ご相談を受けた。門別町郷土史研究会では、これについて協議の結果、門別町へ提出していただくことに決め、更に翁の

生前の労に報い、広く学界に紹介するために、ノートの刊行を決意し、ノートの整理に着手した。資料の整理は昭和42年10月に終了したが、この内容はオイナをはじめユーカラ、ウエペケル等74篇41冊に及んでいる。これを種目別に分類し、故鍋沢元蔵遺稿目録を作成した。次に示したのは、その目録の一部であるが、アイヌ語で記された資料のすべてである。

故鍋沢元蔵遺稿目録 (一部)

整理番号	種別	題名	記録年月日	備考
1	オイナ	Kamuy oyna 第1分冊	昭和40.12	本書に収録
2	〃	〃 第2分冊	〃	〃
3	〃	〃 第3分冊	〃	〃
4	〃	〃 第4分冊	〃	〃
5	〃	〃 第5分冊	〃	〃
6	〃	Pon oyna	41.	〃
7	カムイ・ユーカラ	Kanna Kamuy	41.	北海道の文化13号(42.11.10)発表
8	ユーカラ	Kutune sirka 1~3段	37.10.	調査シリーズ第一に収録
9	〃	〃 4~6段	〃	〃
10	〃	〃 6~7段	〃	〃
11	ユーカラ	Imonka oyan mat	40.3	「アイヌモシリ」17号に発表 本書に収録
12	〃	Huri hayokpe	38.3	本書に収録
13	〃	Ipe wen kinra	39.	〃
14	〃	Huri hayokpe	38.4	〃 No.12の浄書ノート 「アイヌモシリ」18号に発表
15	〃	Iyochi un mat	40.9	本書に収録

16	〃	Nitaypa kaye	40.10	本書に収録
17	〃	Sak somo ayep akoyki	41.1	〃
18	〃	・Wakka sak sukup ape sak sukup ・Seta chiresu, wenpe chiresu	41.4.	〃
19	祈 詞	カムイフチ 外 21篇	39.2	調査シリーズ 第三に収録
20	〃	顔面神経痛呪術祈詞	40.7	〃
21	〃	病人に対する祈詞	40.9	
22	〃	老女の冥土渡し	39.7	調査シリーズ 第三に収録
23	〃	溺死者の冥土渡し	〃	〃
24	〃	火災時の祈詞	〃	〃
25	ウエケベル	Menoko esimukep 外 3 篇	40.5	北海道の文化 9 (41.9.10)発表
26	〃	Yupet un Ikuresuye 他 4 篇	40.5	
27	〃	Ikuresuye 他 1 篇	41.6	
28	ウ ポ ポ	Ayoro 他 15 篇	39.	

すでに述べたように、遺されたノートのうち、ユーカラ「Kutune sirka」は門別町文化財調査シリーズ第一集に、祈詞の大部分は同シリーズ第三集にそれぞれ収録が完了しているので、今回は、これらを除くノートを対象に整理を実施したのであるが、その大半はユーカラが多く、また翁の生前、最も心血を注がれたものでもあるので、オイナとユーカラを一括して刊行するという方針を決定した。幸にもユーカラノートは、すべて一句一句に日本語の対訳をつけて書かれてあったので、これをローマ字に直して整理を進める上には非常に好都合であった。またノートはアイヌ語のくせをよくつかまれて、巧みな書きに表わされていたので、それほどの誤りを犯すこともなく浄書することが出来たと思う。ただところどころに、かなりの意識がみられ判断に苦しむ点も少なくなかったのであるが、富川町在住の伝承者、平賀サタモ嬢の御協力を得て大過なきを得た。かくして原稿の浄書が完了したの

は、昭和43年10月であった。

まもなく故鍋沢元蔵翁の二周忌を迎えようとしているが、ここに翁の偉大なる努力と業績を偲びながら、本書を霊前にささげ、御冥福を祈る次第である。

昭和44年3月

扇 谷 昌 康